東洋経済
TOYOKEIZAI
ONLINE

プロゴルファー「湯原信光」65歳の今、博士目指す訳

ツアー優勝経験もある一流プロが異例の挑戦

赤坂 厚：スポーツライター 著者フォロー

2022/11/11 13:30

シェアする ツイートする ブックマーク メールで送る 印刷 A+ 拡大 A− 縮小

ツアー優勝経験もあるプロゴルファー・湯原信光（写真：本人提供）

今年も日本プロゴルフ協会（PGA）、日本女子プロゴルフ協会（LPGA）のプロテストが終了し、新たに「プロゴルファー」としてスタートするプロたちが生まれた。

ただ、PGA会員約5500人、LPGA会員約1200人の中で、いわゆる「ツアープロ」として、賞金を稼げる選手は一握りしかいない。試合に出て賞金を稼いで……という、一般の方がイメージするプロゴルファーよりも、レッスンなどをしているか、まったく違う仕事をしているほうが圧倒的に多いのが現実でもある。

プロゴルファーには引退がないといわれる。PGA、LPGAともテストに通って会員になれば、不祥事を起こして除名されるか、自ら退会するかしなければ生涯資格を持っていられる。

よくツアープロで「ツアー引退」という言い方があるが、これは「ツアートーナメントで賞金を稼ぐことはやめます」というだけで、プロゴルファーの肩書、資格はあるので、レッスンをしたり、メディアの解説者や評論家をしたりといった、ゴルフの仕事で稼ぐことはできる。

倉本昌弘、羽川豊とともに「三羽烏」として注目

そうした中で、大学院に入学して新たな資格、肩書を得ようというプロがいる。今年65歳になった湯原信光が、日本大学大学院に入学、5年間かけて博士号の取得を目指すという。

湯原について簡単に紹介しておくと、ジュニア時代に日本ジュニアに2勝し、日大に進んで日本アマや国際アマチュアゴルフペア選手権（メキシコ）に優勝するなどアマで27勝を挙げて1980年にプロデビュー。すぐに優勝し、1980年代には倉本昌弘、羽川豊とともに「三羽烏」と呼ばれた。

次ページ　ツアー7勝、東京国際大のゴルフ部監督にも就任

プロゴルファー「湯原信光」65歳の今、博士目指す訳

ツアー優勝経験もある一流プロが異例の挑戦

赤坂 厚：スポーツライター　著者フォロー

2022/11/11 13:30

シェアする　ツイートする　ブックマーク　メールで送る　印刷　A+ 拡大　A− 縮小

ツアーでは7勝を挙げ、50歳になってシニアツアーに入り、1勝している。2013年に東京国際大学ゴルフ部監督に就任。プロ入りしてからはケガや故障に悩んできた。2年前にはコースで転倒して左足首の腓骨を骨折して今もボルトが入っているなど、最近は思うようなゴルフができていない。学生を指導しながら、大学院進学という選択をした。

ツアーで実績を残しながら、大学院に入って新たに知識を広げたプロはこれまでにもいる。ツアー6勝を挙げて、マスターズにも出場した金子柱憲は2011年に早大大学院スポーツ科学研究科に入学し、修士号を取得。レギュラーツアーを主管する日本ゴルフツアー機構（JGTO）で2年間選手会長を務め、ツアー2勝を挙げて今年からシニアツアー入りした横田真一も、2013年に順天堂大医学部大学院に入って修士号を取得している。

湯原は父が工学博士だったこともあって「周囲に医者や研究者が多かった」という環境もあり、現在ゴルフ部監督と共に特命教授を務めている東京国際大の理事長・総長から「ドクター（博士）を取ってほしい」という要望もあった。コロナ禍もあり、大学院受験を試みた。東京国際大にスポーツ系の大学院がなく、常時通学は難しいため、通信制を探して母校日大の大学院に決めた。

母校である日大の大学院に進学した湯原信光（写真：本人提供）

博士号の取得は最短でも70歳

願書提出にあたって、「ゴルフ競技における正しい運動技術確立に向けた運動学的考察」という自身のテーマを詳しく文書で提出。昨年11月に小論文による入学試験を受け、今年4月に入学した。「総合社会情報研究科 博士前期課程 人間科学専攻」と書かれた学生証をうれしそうにみせた。

「年に何回か、スクーリングで大学に行って授業を受けることもある。最初に行ったときはたぶん僕が一番年長だった」と言い、「哲学とか、いままでやったことがない授業は難解でね」と笑った。

1年目は課題をレポートで出す形式だそうで、スポーツ医学の教科書を使うなどしてレポート提出を繰り返し、最終的に論文にまとめていくという。博士号取得は最短でも70歳になる。博士号を持つプロゴルファーが初めてかどうかは不明だが、ツアーで優勝した選手では聞いたことがない。

博士号を取得して、どうしたいのだろうか。

➔次ページ　湯原の答えは？

プロゴルファー「湯原信光」65歳の今、博士目指す訳

ツアー優勝経験もある一流プロが異例の挑戦

赤坂 厚：スポーツライター　著者フォロー

2022/11/11 13:30

シェアする　ツイートする　ブックマーク　メールで送る　印刷　A+ 拡大　A− 縮小

「指導方法をテーマにしたい。これまで自分が経験してやってきたこと、ケガなど傷害への対応などが、正しかったのかどうかの裏付けを知りたい。より鮮明にして、学術論文として後世に残したい」（湯原）

今年10月にはYouTubeに「湯原信光ゴルフ講義」を開設。「グリップから始まって、通常のレッスンではなく、学生に講義するような形で始めた」（湯原）。ツアーで40年以上戦った後に、新たなキャリアに挑戦するというのは、プロゴルファーにとっては「セカンドキャリア」に相当するかもしれない。

プロゴルファーのセカンドキャリア

引退のないプロゴルファーには、セカンドキャリアという考え方は希薄かもしれないが、男女とも若年化しているので、30代でツアーに出られなくなる＝賞金を稼げなくなる選手もこれから増えてくるだろう。そうなれば、事実上のツアー引退ともいえる。

ほかのスポーツでは、例えばプロ野球では実績を残して「引退」という言葉で球界を去れる人はいるが、多くは「戦力外通告」など道半ばで球界を去っていく。サッカーでも同様だ。大相撲も引退というが、かつては引退とはいわず「廃業」という言い方だった。

これらのプロスポーツは、20代、30代で引退するのがほとんどだ。そこで引退した後のセカンドキャリアというのが近年クローズアップされてきており、テレビドラマの題材にもなっている。

プロまで極めた人の多くは、その競技ばかり子どものころからやっていて、いわゆる「つぶしがきかない」というケースは少なくない。若くして引退を余儀なくされたらセカンドキャリアをどうするかは難しい問題だ。

プロゴルファーも小中学生のころからゴルフばかりで過ごしてきた人が多い。誰もが湯原らのように大学院に入ることはできないだろうが、学ぶ場所はほかにもある。新たな資格、知識を得ることは、セカンドキャリアに結び付くかもしれない。

65歳の挑戦がゴルフ界にとっての1つのモデルになれば、あとに続いている選手たちにとってもいい指標になるだろう。（文中敬称略）